

## 『日本を元気に！―復興支援―』

佐藤真海氏

サントリーホールディングス株式会社コーポレートコミュニケーション本部CSR推進部



残せない」と…。その瞬間、私の目から涙が溢れ出し、夢や希望が私のなから消え去りました。

### ■共に病氣と闘った仲間たちと母の言葉

抗がん剤の大量投与は想像を超えた苦しきで、心の底から、「なぜ自分なんだろ」と運命を恨みました。

そんな私に病氣と闘う勇気を与えてくれたのは、共に病氣と闘った仲間でした。常に前向きに「必ず治る」と信じて闘う姿に、「自分だけが逃げてはいけない」と思えたのです。また、母からの「神様はその人に乗り越えられない試練は与えない」という言葉も支えになりました。先が見えない治療から逃げ出したくなると母の言葉を思い出し、「自分なら乗り越えられる。乗り越えればまた二歩でも成長した自分に会えるかもしれない」と言い聞かせ、「必ず大学に戻る」を目標に、精一杯病氣と闘いました。

### ■スポーツが与えてくれた生きる力

約10カ月の入院後、私は大学に戻りました。しかし、日に日に私は自分らしさを失っていききました。その理由は、友人たちが就職活動をするなか、自分は生きるだけで精一杯であることに気づいてしまったからです。数か月間は心から笑えない日々が続きま

したが、ある日、「ウジウジしながら生きるために病氣と闘ったわけではない」と思えるように。そして、ワラにもすがる思いで走り始めました。

とはいっても、そう簡単に走れるものではありませんでした。しかし、少しでも遠くまで走れるようになりたい―と何度も転びながらも諦めずに走るうちに、私は自分らしさを取り戻すことができました。さらには、大学を4年で卒業し、就職するという目標まで抱けるようになったのです。そんなときに出会ったのが「やってみなはれ！」の言葉です。今までの人生を振り返り、今後の生き方を漠然と考えたときに出会ったこの言葉に魅かれ、サントリーの入社試験を受けました。

### ■大切なものは私が持っているもの

私は入社1年目の2004年に開催されたアテネパラリンピックに、走り幅跳びの選手として出場しました。記録は、世界のトップ選手が5m以上を飛ばすなか3m95cmでも、世界中のパラリンピアンが生き生きとチャレンジする姿を見る機会を得たことで、私は「次のパラリンピックを目指そう。仕事も頑張ろう」と本意の意味で前向きになれました。

さらに練習を続けるなかで、「自分にあるものを最大限に引き出すことが、スポーツにおいても人生のなかでも大切だ」と思うようになりました。また、自分で限界を作らなければ、どんなことでも叶うのではないかとも思い始めました。そんな思いでチャレンジしたのが世界のトップ選手たちが取り入れていた「義足踏み切り」です。結果的には、2009年から練習を始め、2012年3月のパラリンピック最終選考会で4年ぶりに自己記録を出し、ロンドンパラリンピックでも自己記録を更新する4m70cmを飛びました。さらに2013年4月には、

5m2cmの日本記録(当時)を更新しました。この記録は、初めてパラリンピックに出場したときには雲の上の数字でした。それを10年かけて実現したのです。

パラリンピックで私は成長させてもらったと思っています。だからこそ、私は2013年9月の東京オリンピック、パラリンピック招致の最終プレゼンテーションで言いました。「I learnt that what was important... was what I had, not what I had lost.(大切なものは、私が失ったものではなく、私が持っているもの)」。

### ■命の大切さを再認識した東日本大震災

大地震が東日本を襲った2011年3月11日、東京にいた私は気仙沼に住む家族と連絡が取れなくなりました。生まれ故郷を跡形もなくしてしまった津波、その夜の大火事の映像を見ながら、「とにかく生きていてほしい」と私は祈り続けました。幸いにも、現地に探しに行こうと思つた6日目、ようやく母の元気な声を聞くことができました。その瞬間、家族の大切さ、そして、骨肉腫と宣告されてからの10年間、すっかり忘れてかけていた命の大切さを改めて再認識しました。

それからは、骨肉腫という病氣になり、また、東日本大震災で家族が被災した私だからこそ語ることができる「夢を持つことの大切さ」「命の大切さ」をひとりでも多くの子どもたちに伝えられればと、東京の小学校を中心に、子どもたちと語り合う活動を始めました。それと同時に、「自分は強いからチャレンジを続けてきたのではなく、弱いからこそ周りのみんなの心を支えるに努力することができた」と伝えるために、震災直後から気仙沼の小学校や中学校を訪問しています。

### ■絶望に陥った病の宣告

小学生のときは水泳、中学と高校では陸上部で中長距離、大学ではチアリーディングをするなど、子どものころからスポーツが大好きでした。そんな私が右足首に痛みを感じたのは、大学2年生の夏の終わりのことで、3件目に訪れた国立研究がんセンターで「骨肉腫」と宣告されたのはその年の12月でした。

担当医は、病名さえ知らなかった私に、抗がん剤を大量投与した後手術をし、その後半年間は全身への転移を防ぐために治療が必要であると言いました。そして、5年後の生存率を告げた後、最後に「すべての治療がうまくいっても、右足の膝から下は

■スポーツの力を伝えるために  
招致活動に参加

2013年、「スポーツの力をもっと大きくしたい、広く伝えていきたい」という気持ちで『東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会』に加わりました。

そして、3月から9月までの半年間、私は次の3つをモチベーションに活動しました。ひとつ目は、自分自身を救い、震災を通じてより多くの人と共感することができた「スポーツの力」です。ふたつ目は「パラリンピックの底力」、そして、3つ目が「復興」です。そして、「スポーツの力」への感謝を伝えたいと思い、プレゼンテーションの冒頭で「I am here because I was saved by sport. It taught me the values that matter in life.」との10年間、スポーツによって救われたこと、また、スポーツが私に人生で大切な価値を伝えてくれたことを述べました。

■人と人をつなぎ懸け橋に

私は招致活動を通じ、熱い思いが集まれば世の中を変えることができることを学びました。ということは、「オールジャパン」としての熱い思いがあれば、2020年のオリンピック・パラリンピックの成功はもろろんのこと、障がい者や高齢者、小さな子どもを含めた全ての人の暮らしを守る日本になれるはずで。

そんな人に優しい日本を未来に残すためにも、スポーツが人と人をつなぎ懸け橋になれるよう、その一翼を担いたいと思っています。

〈要約抜粋〉

座談会

高橋副会長「やつてみなはれ」という言葉は、人生にどのように影響を与えていますか？



佐藤氏「何をすれば 佐藤真海氏

よいか明確な目標がないときに「やつてみなはれ」という言葉に出会いました。

入社を決意したのは、「やりたいことが見つ

けられないのではないか、のびのびと新しいことにチャレンジできるのではないか」と思ったからです。就職してからは、社会貢献を担当する部に配属になり、子どもたちと夢を持つことの大切さを語り合ったり、子どもたちのモチベーションを高めるためのワークショップを企画運営したりすることで、自身も成長してきたと思っています。

佐々木氏「入社後の12シーズンはバレーボールに専念させてもらい、33歳で現役引退

してからは自分から志願して営業職に就きました。しかし、世のなかはそれほど甘くなく、2年ほどは経験したことのない辛さを味わいました。今だから言えますが、家に帰って泣いたことも……。そんなときに、ウイスキーの資格があることを知り、「やつてみなはれ」の言葉を支えに、4年間かけて『ウイスキーアンバサダー』『ウイスキーエキスパート』『ウイスキープロフェッショナル』『マスターオブウイスキー』の資格を取得しました。もちろん、目的は資格を取ることでありません。バレーボールに自信を持って打ち込んだのと同じように、ウイスキーの知識を高めることで、自信を持つて営業をするためでした。

高橋副会長「人生における転機を迎えたとき、どんな思いで乗り越えましたか？」

佐藤氏「私のように100万人にひとりと言われる骨肉腫にかかり、パラリンピックにも出場できるのは、おそらく数100人にひとりでしょう。まさに宝くじに当たったようなものです。招致活動に参加するなど、病気になるまでは想像もしていなかった人生を歩んでいます。これにも何か意味があるはず。今後、どんな転機が訪れても、「自分のできることは何だろう」と考えながら乗り切りたいと思っています。



高橋副会長

東日本大震災を通じて感じたスポーツの力を教えてください。

佐藤氏「10年前、足を失ったときには言葉にできないほどの喪失感を体験しましたが、完全に乗り切つてからはその辛さを忘れていました。しかし、東日本大震災の後、現地の人たちの気持ちを考えたとき、比べものにはならないかもしれないが、あのときの喪失感を思い出したのです。だからこそ、自分自身がそうだったように、スポーツで喜怒哀楽の感情を発散してもらいたい、スポーツを通じて人と人がつながってほしいと考えました。

佐々木氏「震災後、春の高校バレーボール大会の解説をしていたとき、被災地から出場した高校生の試合を見て、最初は「なんこんな笑顔ができるんだろう」といったたまれない気持ちになりました。しかし試合を見ているうちに、そのような目で彼らを見ていたことが間違っていると思うようになり、彼らはスポーツが好きだから頑張っているだけなのです。そう思ってから、彼らがスポーツを楽しめるように応援する、「一緒にやろう」と声をかける、それが自分ができることであり、スポーツなら

ではの力だと思つてようになりました。

高橋副会長「招致委員会のメンバー入りされていた半年間はどんな期間でしたか？」

佐藤氏「一番不安だったのが、日本の方々为本当に応援してくれているのがわからなかったことです。開催決定後に帰国し、日本中が盛り上がりつつあったのを見て本心に安心しました。その一方で、私がこれまでの3大会で力をもたらつたように、2020年の大会では、日本が多くのアスリートに力を与えなければならぬと思ひ、気が引き締まりました。

高橋副会長「今後の目標をお聞かせください。

佐々木氏「日本でオリンピック・パラリンピックが開催されるので、これを機に一人ひとりがスポーツする機会を増やし、日本全体で成功に向かつていければと思います。私もスポーツをしてきたOBのひとりとして、さらにスポーツの力を伝えていくつもりです。



佐々木氏

佐藤氏「まずは自分自身が地に足を付け、アスリートとしても社会人としても成長したいと思っています。そして、自分の力、日本の力、そしてスポーツの力を信じ、東京オリンピック・パラリンピックを成功させるために、招致活動以上にみんなで力を合わせていきたいと考えています。

〈要約抜粋〉